

資 料

イギリス労働組合会議ライブラリー・コレクション Trades Union Congress Library Collections

増 田 正 勝*

I. は じ め に

1987年にロンドンを訪れたときには、もっぱらロンドン大学のLSE (London School of Economics and Political Science) のライブラリーに通っていて、イギリス労働組合会議(TUC)のライブラリーの存在をまったく意識していなかった。その後、ノース・ロンドン大学にTUCライブラリー・コレクションが移管されたというニュースに接し、機会があれば是非一度訪れてみたいと思っていた。

イギリスでは90年代に入ってから、キャドバリー委員会の報告『コーポレート・ガバナンスの財務的側面』(The financial Aspect of Corporate Governance) (1992年)をきっかけに、コーポレート・ガバナンスの改革をめぐる論議が急速に高まった。法学者を中心に論文や著作が多く書かれるようになり、日本でもイギリスにおけるコーポレート・ガバナンス改革についてよく紹介されるようになった。

ところで、ドイツのコーポレート・ガバナンスでは、労働者の共同決定制度を抜きにしてこれを論じることはできない。会社執行部に対する監視・監督機能の一端を労働者代表が担っているのである。イギリスでは、ステークホルダー(利害関係者)としての労働組合はコーポレート・ガバナンスの問題にどのように取り組んでいるのだろうか、ということに、ドイツの共同決定制度を長年研究してきた筆者は、かねてより強い関心を寄せていた。この問題について日本ではあまり情報を得られないので、一度、現地で調べてみたいと思っていた。

そこでこの度、3月中旬、LSE図書館を再訪するとともに、TUCライブラリー・コレクションを訪れることにしたのである。ここでは、このTUCライブラリー・コレクションについて紹介と若干の考察を行いたい。

* 広島経済大学経済学部教授

II. TUC ライブラリー・コレクションの歴史

TUC ライブラリーは、1922年に創設された。TUC 議会委員会、労働党情報局、女性労働組合連盟 (Womens Trade Union League) がそれぞれ収集してきた図書資料が、この TUC ライブラリーの基礎となった。このとき以来、TUC ライブラリーは、労働党と TUC の共通のライブラリーとして運営されるようになった。

第2次大戦後、1956年になって、この TUC ライブラリーは、TUC 本部会館の中に移され、もっぱら TUC および TUC 加盟組合の利用に付されることになった。同時にこのときから社会科学向けの研究図書資料としても充実がはかれることになった。

そして、既述のように、1996年になって、TUC ライブラリーは TUC から切り離されて、ノース・ロンドン大学 (University of North London) に移管されることになった。1993年末まで TUC ライブラリーに収集されてきた図書資料がコレクションとして同大学へ移管されることになったのである。ノース・ロンドン大学では、このコレクションの保管とともに、TUC およびイギリス労働組合関係の機関誌、出版物、定期刊行物、関連資料等の収集はそれ以後も継続的に行っている。

ノース・ロンドン大学は、2002年8月に、ロンドン・ギルドホール大学 (London Guildhall University) と合併されて、ロンドン・メトロポリタン大学 (London Metropolitan University) として新たに出発することになった。したがって、現在、TUC ライブラリー・コレクションは、このロンドン・メトロポリタン大学に保管されているわけであるが、ノース・ロンドン大学時代と同じ場所に置かれており、別のところに移されたわけではない。同じく学習センターの図書館の中に所蔵されている。

TUC ライブラリーがなぜノース・ロンドン大学に移管されることになったのか、そのいきさつについて、ライブラリアンのコーツ氏にインタビューしてみた。コーツ氏によれば、TUC が財政的に逼迫して、いわばダウンサイジングとして本体から切り離されたのだ、ということであった。コレクション自体は依然として TUC に所属し、その管理運営だけがメトロポリタン大学に委託されているのである。

コレクションでは数人の職員を見かけたが、ライブラリアンのコーツ氏だけが TUC に雇用されており、他の人員はメトロポリタン大学の職員であった。TUC はコーツ氏の人件費だけを負担していることになる。

では、なぜノース・ロンドン大学にコレクションが移管されることになったのか、という筆者の質問に対しては、ノース・ロンドン大学のほうから申し出があったか

らだ、という簡単な答えしか返ってこなかった。LSE など他の大学ではなく、ノース・ロンドン大学がコレクションの移管を引き受けたということの背景には、何か特別の理由があったのではないかと推測される。そのことについては後述する。

Ⅲ. TUC ライブラリー・コレクション

地下鉄ピカデリー線に乗ってキングス・クロス駅から二つ目のハロウエイ・ロード駅を降りると、道路を隔ててすぐ目の前にメトロポリタン大学学習センター(The Learning Centre)があった。この辺りは周辺に工場の建物などが見え、ロンドンの中心街からやって来ると労働者の街といった雰囲気がある。

学習センターは、ガラス張りの4階建ての建物で、入るとすぐ図書館になっており、その1階の奥にTUCライブラリー・コレクションがあった。これは別室になっていて自由に入出入りができない。前以て閲覧許可を受けた者だけが入室できる。

部屋のほとんどは移動式の書架によって占拠され、パソコンとコピー機を置いた閲覧空間が2箇所にて設けてある。そのひと隅にライブラリアン、コーツ氏の部屋があった。奥行き10メートル、幅20メートルほどの空間に移動式書架がほとんど隙間なく設置され、だれかが書架を動かすと、別のところを空けるのが難しいほどの過密状態であった。5層の書架の両面には文献資料がびっしりと押し込まれ、単行本や定期刊行物以外は、文献資料を箱詰めにして、その箱にそれぞれ資料名が書かれている。その所蔵数の多さに圧倒される思いであった。

TUCライブラリー・コレクションの中心をなしているのは、①労働組合運動に関する歴史資料および研究書、②イギリスおよび海外の労働組合出版物、③さまざまな産業における労働条件および労使関係に関するドキュメント、④1868年のTUC創設以来、TUCが関わってきたキャンペーンや政策領域から幅広く収集された資料類、である。内容別に見ると、労働組合活動、海外の労働事情、労働者の伝記類、女性労働者問題、労働争議、労働党出版物などをカバーしている。5,000のタイトルの定期刊行物が収蔵されており、中には80年間ずっと続いている定期刊行物もある。

さらに、労働組合、圧力団体、キャンペーン運動によって配布された無数のパンフレット類が収集されている。そのほとんどは1920年以後のものであるが、中には19世紀までさかのぼるものもある。この種のコレクションとしては他に類を見ないものようである。

また、労働組合およびその他の組織、労働組合活動家に関する新聞切抜きがおよ

そ900のファイルに収められている。

いくつかの貴重な文書コレクションもある。もともとは TUC ミュージアム・コレクションに保存されていたものが、1998年にノース・ロンドン大学に移管されたのである。特別なコレクションとして以下のものがある。

①労働者教育協会 (Workers' Educational Association. WEA.) 図書・文書：WEA が1903年に設立されて以来の公式記録 (議事録, 年報, ジャーナル等) および諸文書が収められている。20世紀の成人教育および生涯教育の研究にとって貴重な資料である。②ニコルソン・コレクション：1955年から1972年まで TUC 海外部局で活躍したニコルソン (Marjorie Nicholson, 1914-1997) の個人的収集資料。③トックウエル・コレクション：女性労働運動家トックウエル (Gertrude Tuckwell, 1861-1951) のコレクション。女性労働組合連盟 (Womens' Trade Union League) に関する貴重な資料を集めている。

カナダ, オーストラリア, ニュージーランド, 香港など旧英連邦の国々の資料もさることながら, イギリスはかつて多くの植民地を運営していたため, アジアやアフリカの国々の労働関係資料も多い。日本の労働組合の資料もあった。筆者が専門とするドイツの労使関係については, ドイツでもなかなかお目にかかれない, 第1次大戦以前の文献も収集されていた。国際的に広くカバーしているところに, この TUC ライブラリー・コレクションの大きな特徴があると思われる。

もうひとつの特徴は, 労働組合活動家や労働運動家の手記・書簡・文書等がよく収集されていることである。女性労働運動家の黄ばんだ手記や書簡がそのまま保存されている。しっかりとした手書きの文字を見ていると, 彼女たちの信念と意志の強さが時を超えて伝わってくる。また, 先達たちの足跡を称え, そこからたえず勇気と知恵を引き出そうとするイギリス労働組合運動の強い意思を感じ取ることができた。

IV. ノース・ロンドン大学と TUC ライブラリー・コレクション

TUC ライブラリー・コレクションがノース・ロンドン大学に移管されたいきさつについては, ライブラリアンのコーツ氏は詳しくは話してくれなかった。前述のように, 大学側から申し出があったからだという簡単な説明しかなかった。

それにしても, なぜノース・ロンドン大学はこのコレクションを積極的に受け入れようとしたのであろうか。

ノース・ロンドン大学の歴史をひもといてみると, およそ100年前の1896年に,

ノーザン工芸専門学校 (Northern Polytechnic Institute) として発足している。英語、数学、化学、機械製造、鉛管製造、洋裁、帽子製作のコースをもった専門学校であった。1900年までに学生数は倍増し、1911年には5年間の夜間コースが開講され、ロンドン大学によって学士の学位が認められるようになった。

1929年、ノース・ウェスタン工芸専門学校 (North Western Polytechnic) が設立された。この新設の工芸専門学校では学生数も2,200人を超え、教授陣も150名を抱え、社会科学、人文科学、美術工芸に力を入れ、先行のノーザン工芸専門学校をはるかにしのぐ成功を収めた。1967年頃にはロンドン最大の工芸専門学校に育っていった。

1971年1月、さらに工芸専門学校としての特徴を出そうと、ノーザン工芸専門学校とノース・ウェスタン工芸専門学校が合体して、ノース・ロンドン工芸専門学校 (Polytechnic of North London) として新たに出発することになった。

このとき全国大学審査評議会 (Council of National Academic Awards. CNA) によって大学としての資格を有することが認定された。1992年には、“大学” というタイトルをもつ権利が認められた。

こうしてノース・ロンドン工芸専門学校がノース・ロンドン大学になったわけであるが、既述のように、2002年8月にはロンドン・ギルドホール大学と合併してロンドン・メトロポリタン大学となるので、ノース・ロンドン大学として生きた期間はわずか10年であった。この間の1993年に TUC ライブラリー・コレクションの移管が行われたわけである。

以上のようなノース・ロンドン大学の歴史をふり返ってみると、パブリック・スクール出を受け入れる伝統ある大学とは異なって、庶民の教育機関、労働者の教育機関として発足して、次第に高等教育機関へ育ってきたことがわかる。ノース・ロンドン大学は、「非伝統的なバックグラウンド」(nontraditional backgrounds) から来る若者たちに高等教育の機会を広げることを特別の使命とし、それに大きく貢献してきたのである。

TUC ライブラリー・コレクションとは別に、「労働者教育協会」(WEA) の図書・文書資料も1998年にノース・ロンドン大学に移されている。この協会の創設年の1903年から収集されてきた図書・文書資料がこのコレクションを形成している。労働者教育協会とノース・ロンドン大学との間には緊密な協力関係があって、大学院に労働組合職員を積極的に受け入れたり、人的資源・雇用研究を労働組合研究と有機的に結びつけようとしている。

ノース・ロンドン大学がその図書館に TUC ライブラリー・コレクションを進ん

で受け入れたことの背景には、このような生成・発展の歴史があるとともに、労働組合運動にコミットする多くの人材を輩出してきたこともあったと考えられる。TUC ライブラリー・コレクションにとっては、例えばロンドンのシティ近くに位置する LSE の図書館よりは、ここのほうがずっと住み心地もよく落ち着くことであろう。

V. TUC ライブラリー・コレクションの Web 公開

膨大なコレクションの Web 公開化が進行中であった。第2次大戦以前までの資料についてはほぼ作業が終わっているとのことで、ライブラリアンのコーツ氏のパソコンでその一部を拝見させていただいた。

これだけの作業には相当の時間とコストがかかったと思われる。そのことについてたずねてみると、NOP (New Opportunities Fund) から175,000ポンド(約3500万円)の資金援助を受けているとのことであった。

このように Website に収録されることによって、やがては世界中どこからでも TUC ライブラリー・コレクションにアプローチできるようになる。もうイギリスに来る必要はなくなりますよ、とコーチ氏は笑いながらいわれる。

もっとも、すべてのコレクションが Web 公開されるわけではない。パンフや文書の類はかなり収録されるとしても、定期行物や単行本となるとタイトルと概要程度を Web 公開できるだけであろう。いずれにしろ膨大な資料から取捨選択が行われるはずである。いわば一種の編集作業が行われる。しかし、たとえすべてのコレクションをカバーしていないとしても、この Web 公開化から海外の研究者たちは大きな恩恵を受けることになる。

ところで、これまでわざわざ外国まで文献探索に出かけた経験からすると、やはり現場に行ってみないとわからないところがたくさんあるように思われる。実際、書庫に入って、一つひとついねいに文献に当たっていく中で、多くの発見があるのである。予想もしなかった発見で、大きな興奮に駆られることがある。未知の資料に出会ったときはもちろんであるが、文献資料を手にとってそれと直接対話している中で、ひらめきやアイデアが生れてくるのである。

情報化の進展とともに、こうした現場主義を軽視する風潮が強くなることが大いに危惧される。便利さや効率性だけが優先されていく。人や文献資料と直接出会って、その空気を吸い肌で感じることから得られる生の情報を大切にしたいものである。この度こうして TUC ライブラリー・コレクションを閲覧し、ライブラリアン

のコーツ氏にインタビューして得られたものは、とても Website ではかなえてくれそうにもない。現場に行くということは、いわば実際の風景の中に身を置くことである。しかし、Web 上の情報は、自分以外のだれかがその風景を切り取って映像化したものであるにすぎない。便利かもしれないが、本物のほうがおいしいことはいうまでもない。

VI. む す び

LSE の図書館では、労使関係関連の文献と定期刊行物を中心に、コーポレート・ガバナンスに関する労働組合サイドの見解を聞こうと、逐一当たってみたが、あまり収穫はなかった。しかし、TUC ライブラリー・コレクションでは、TUC および加盟組合の機関誌や定期刊行物を一挙に見ることができ、貴重な資料をいくつか入手することができた。キャドバリー報告書（1992年）が出てしばらくして1995年あたりからようやく TUC や労働組合の反応が出てきているようである。さらに関連文献を集めて、論文にまとめたいと思っている。

最後に、TUC ライブラリー・コレクションのライブラリアン、コーツ (Christine Coates) 氏には、ご多用にもかかわらず、ていねいにご案内して下さるとともに、筆者のインタビューにも応じてくださった。誌上を借りて厚く御礼申し上げます次第である。